

令和3年1月18日

学位論文審査並びに最終試験結果報告書

大学院歯学研究科長 殿

主査 越野 寿

副査 古市保志

副査 志茂 剛



今般 末永智美 にかかわる学位論文審査並びに最終試験を行い下記の結果を得たので報告する。

記

1 学位論文題目

施設高齢者における口腔機能低下の予測因子に関する研究

2 論文要旨 別添

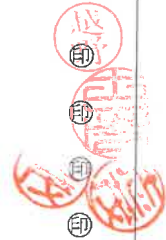
3 学位論文審査の要旨 別添（様式第12号）

4 最終試験の要旨 別添（様式第13号）

以上の結果 末永智美 は博士（歯学）の学位を授与する資格のあるものと判定する。

学位論文審査の要旨

主査	越野 寿
副査	古市保志
副査	志茂 剛
副査	



氏 名 末永智美

学位論文題目 施設高齢者における口腔機能低下の予測因子に関する研究

以下本文

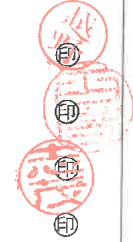
本論文は、歯科専門職に限らず日常生活に関わる施設職員等の“気づき”から、「口腔機能検査の実施可否」と「口腔機能の低下」を予測可能とすることが重要であると考え、介護施設利用中の高齢者を対象に、歯科専門職でなくても評価可能な日常生活動作とリンシングが口腔機能低下症の検査の実施可否と口腔機能低下の予測因子になり得るか検討を行ったものである。特に、多くの臨床例を対象として、認知、運動機能の評価と口腔機能の評価を総合的に行っている点で評価は高い。

口腔機能、認知機能、ADL、栄養状態について評価を行った結果、CDRスコアの増大に伴い口腔機能低下症の検査が困難な者が増加していることを示した。また、CDRとリンシングは、口腔機能低下症の検査実施可否と有意な相関が認められ、口腔機能低下症の検査が全て実施可能かを予測する因子になり得る可能性を示した。さらに、口腔機能低下症の検査項目との関連では、FIM 総スコアはODK、舌圧、咀嚼機能、EAT-10において有意な相関が認められ、FIM下位項目では、下半身の更衣、ベッド・椅子・車椅子への移乗、歩行・車椅子の移動において有意な相関が認められることを明らかにした。

本研究で予測候補因子としたFIMとリンシングは、日常生活に関わる施設職員等の“気づき”から得られる客観的評価であるとともに、口腔機能低下症の全検査実施の可否ならびに口腔機能低下の予測因子となり得る可能性を示唆したものであり、学位論文に値するものと判断した。

最終試験（学力の確認）の要旨

主査	越野 寿
副査	古市保志
副査	志茂 剛
副査	



氏 名 末永智美

以下本文（10行目から200字以内）

末永智美氏から提出された学位論文『施設高齢者における口腔機能低下の予測因子に関する研究』について、主査 越野、副査 古市、志茂の3名で、最終試験としての学力評価の試問を実施した。

その結果、歯学に関する幅広い知識と学位論文に関連する深い専門的知識を有しており、学位授与に値する学力があることを確認した。